

### (3) 地域の中でその人らしく生きる

事例 7	地元の祭りや行事に参加することで、地域の人との繋がりの大切さに気付いた事例 (小規模多機能型居宅介護)
---------	--

#### 〔背景〕

サービスを利用されている人の中で、地元の祭りが近づいて来ると、子どもの頃や若い頃のことを生き生きと何回も話される人がいる。現在は認知症もあり、足が悪いためになかなか参加することが出来ずに、祭りの日は寂しそうな顔をされている。なんとか、祭りに参加され元気を取り戻していただきたいと思い、支援して行く方法を考えることにした。

#### 〔内容・現状〕

地域では、秋祭りや寺の祭りが古くから行われており、元気な時には息子が参加するのを見に行かれたり、茶碗やお茶などの買い物やをされていた利用者もいる。今では足が悪かったり体調が思わしくなかったりで、なかなか外出することが難しく、祭りの日には寂しそうな表情をされることが多い。そのために少人数ずつではあるが、マン・ツー・マンで職員が付き添い、何回かに分けて利用者と外出することにした。

最初は、地元ということで、知り合いに車いすを利用している姿や、元気な頃とは様子が変わった姿を見られたくないと思われる利用者もあり、利用者が辛い思いをされるのではないかととても心配していた。しかし、知り合いに出会い、相手から近づいて声をかけてくださると、懐かしそうに笑顔になり、楽しそうな様子で祭りを満喫される。また、事業所に戻ってからも表情は明るく、疲れた様子もなくおだやかに、後日「行ってよかったね。」と話される利用者もいる。

#### 〔所感・今後取り組みたいこと〕

祭りに行ったことで、利用者がどのような状態になられようとも、今まで構築されてきた地域の人とのつながりは変わらない事を痛感した。しかし、通い・訪問・泊りを組み合わせたサービスを提供していく中で、認知症の人それぞれの症状が大きく異なり、外出することもままならない人もおられるのも否めない。また、地域の関わりを大事にしたいと思い、出来る限り地域行事に参加するよう努力しているものの、通いで来られる時にまで、掃除などの地域行事に参加されるのはいかがなものかという思いもある。

今後も利用者本人の意思を最優先に考え、外出や地域行事の参加を通して、地域の人とのつながりを大切にしていきたいと思う。

#### (4) 地域の人たちと共に生きる

事例 8	小学校の草取りをとおしてグループホームでできる社会参加の取り組みをしている事例 (グループホーム)
---------	--

##### 〔背景〕

「その人らしく、楽しく、ゆったりと安心して」という理念のもと、毎日、利用者の人々と暮らしていく中、ある利用者が「毎日、毎日こんなことをして何の意味があるの？私たちは働かないとお金ももらえんし、生活できんのじゃないんかね？いい加減、遊ぶのはやめて働きに行こうや。」ということをお話されることがよくあった。

確かにグループホームの中での生活は、洗濯、掃除、食事づくりと自分たちが生活をしていくためのことはできているが、「人のために役に立つ」「社会に出ていく」ということは行えていなかった。そこで何か皆さんでできることはないだろうか職員で話し合い、交流をしている小学校へ相談をし、「外庭の草抜きを授業時間で邪魔にならないときにさせていただけないだろうか。」ということをお願いする。幸い小学校からは「掃除時間に子どもたちと一緒にされてはどうですか。」という返事をいただくことができた。

##### 〔内容・現状〕

新学期が始まり、一年生が落ち着いた5月末より学校とグループホーム都合のいい曜日を相談し、火曜日と木曜日の週2回の掃除時間に伺うことになった。小学校からは「掃除が始まる前の休憩時間から来られたらどうですか」という提案もいただき、遊んでいる子どもたちが「こんにちは」と声をかけてきてくれる頃に小学校へ到着し、そのまま掃除場所へ一緒に移動するという流れが自然と出来上がっていった。

実施期間は5月～6月で7回、暑い期間はお休みにし、10月～11月で8回と計15回実施した。参加された利用者の人々の状況は表1のとおりである。

最初は草を抜くことが目的で、子どもたちと会話をされるということは少なかったが、職員が話題の提供を行うことにより徐々に会話もみられるようになってきた。女子児童より「おばあちゃんじゃないみたい。草を抜くのが早すぎる！」と驚きの声も上がり、皆得意そうな笑顔になる場面もみられた。そして回を重ねることにより、小学校の滞在時間も長くなり、最後の2回は掃除時間が終了しても延長して作業をするということが行えるまで集中力が続くようになってきた。最後の日には草抜きを終えた後も、子どもたちと一緒に花壇への花の苗植えを行うことができた。

##### 〔所感・今後取り組みたいこと〕

毎回終了後には、お茶を体育館の前で飲み、「あ～楽しかった。」「(時間が)すぐじゃね。もう少し抜けばええね。」など、その日の感想を言われ、満足感、達成

感を得られたように思われる。また尊敬の言葉などをもらおうと得意そうな表情もあり、活気づけられ、いい刺激になっていたように思う。これからも小学校との連携を図り、交流を続けられるようにしていきたいと思う。

(表1)

氏名	性別	年齢	介護度	認知症高齢者の日常生活自立度	参加回数
N氏	女性	73	2	Ⅲb	14
I氏	女性	90	1	Ⅱa	12
K氏	女性	76	1	Ⅱa	11
Y氏	女性	84	1	Ⅱa	8
M氏	女性	80	2	Ⅲb	8
H氏	女性	84	1	Ⅱb	7
F氏	女性	91	2	Ⅲb	6
Y氏	女性	77	3	Ⅳ	6
H氏	女性	80	2	Ⅱa	5
O氏	女性	72	1	Ⅱa	3
S氏	女性	93	2	Ⅳ	2
F氏	女性	87	1	Ⅱa	2

(小学校での草取り風景)



#### (4) 地域の人たちと共に生きる

事例 9	お泊まりボランティアの協力により、夜間、利用者や職員が安心して過ごせるようになった事例（グループホーム）
---------	--

##### 〔背景〕

長崎県大村市のグループホーム火災による死亡事故の事件を受けて、職員から「夜勤者が1人で9人の認知症のお年寄りを介護するのはとても不安である。何とか2人体制にはならないものか。」と要望があった。全国のグループホームの夜勤者全員の願いであろうが、夜勤2人体制にすれば当然赤字は予想される。そのために「お泊まりボランティア」の発掘を考えた。早速、グループホームの近くに住んでいる一人暮らしの人にボランティアをしてくれる人がいないか地域の民生委員3名に集まってもらい相談を持ちかけた。

##### 〔内容・現状〕

民生委員の声かけで11名のお泊まりボランティアが集まり、要望の声があつてから1ヶ月後には、「お泊まりボランティアの会」が発足した。

ボランティアの来所される時間は特に決まっておらず、都合のよい時間帯ということになっているが、夜間は19時30分～20時30分の間に来られ、朝は6時頃帰られることが多い。

また、ボランティアの人には、ただお泊まりをすることをお願いしているが、好意で「何かお手伝いをする事があれば・・・」とおっしゃられ、いらなくなったシーツを切ってウエス作りをしてくださったり、地元の利用者がおられる時などは、なごやかな雰囲気でお話もされたりするので、グループホームにいながら地域の人とふれあう機会も持て、大変喜ばしいことと思っている。

緊急時の応援ということでお泊まりボランティアの人には了解していただいているが、日頃から夜間対応も含めての避難訓練には参加をしていただき、緊急時にはとっさに対応できるような環境を整えている。現在、毎日のお泊まりにはなっていないものの、職員からは「ボランティアに泊まってく日は安心して勤務できる。」との声もあり、なくてはならない心強い存在になっている。

##### 〔所感・今後取り組みたいこと〕

現在、お泊まりボランティアの他にも、地域の人々と協働して野菜畑を作っているボランティアがある。また、約20名の運営推進委員を中心に、祭りや行事を自治会や地域の人と一緒にいながら交流を深めている。

同法人の別のグループホームでは、近所で生活している人がほとんど独居や高齢

者夫婦であるために職員が見守りをしている。ゴミ出し・おかずのお裾分け・少しの買い物など行い、グループホームにも気軽に話しに来ていただき、お茶を一緒に飲んだりしている。

このような地域との交流は、利用者もグループホームという限られた空間だけでの関係ではなく、地域という広い空間での関わりを持つ機会ができ、生活する上での張り合いにもなる。また、地域の人々にも認知症について知っていただくいい機会にもなっていると思う。

今後も地域の中に施設があることで、地域の人が施設を支え、施設が地域に貢献することでお互いが「地域づくり」のパートナーとしての役割を作っていきたいと考えている。



みどりボランティアと避難訓練



畑ボランティアと：（保育園児を助けること）

#### (4) 地域の人たちと共に生きる

事例 10	利用者自身がその人らしい生活を継続するために、行動障害への対応をしつつ、家族・地域・事業所が連携をして支援している事例 (グループホーム)
----------	--

##### 〔背景〕

事業所のある同じ地域で長年生活してきた人が、グループホームの利用者となったことで、地域住民は本人の姿を見て悲観的になってしまった。また、利用者の何がしたいのか、何をしているのか等、全く予測がつかない行動に、家族は落胆し、周りの利用者の人たちからはたびたび苦情が出るようになった。そこで、利用者がその人らしい生活も継続できるように、家族・地域・事業の連携を深めながら支援していくことが必要だと思った。

##### 〔内容・現状〕

当事業所は、地域の中のホームとして位置づけられ、グループホームを地域住民に理解していただくために、施設案内をしたことがきっかけで、老人会・民生委員・小学校・保育所との交流が始まった。具体的には、①地域からの希望による老人会の会報作成、②2ヶ月に1度の運営推進会議における民生委員と職員の意見交換、③民生委員の集いを利用した施設紹介や実態発表、④警察職員による緊急の場合の対応、⑤調整のつく範囲内での小学生・園児との交流が行われている。

このように事業所と地域との交流はあるが、すべての住民一人ひとりが認知症を理解してくださっているとは言い難い。例えば利用者の中には地元出身者がいて、顔見知りの方が来訪されると、利用者は懐かしく思い笑顔で側に行こうとされるが、入居される前との変わり様に地元の人は驚き、戸惑いを隠せない様子のおられる。また、散歩時に時折顔見知りの人に出会うと、利用者に気軽に声をかけられるものの、昔を知っていることから悲観的的心境をもたれることには変わらない状態である。少しでも多くの地域の人に理解していただくために、また、利用者が住み慣れた地域の中で生活していただくためにも、地域と切り離して考えることはできないので、事業所に来訪していただくだけでなく、時間が許す限り職員の付き添いで一緒に散歩をしていただいている。

また、利用者が安心して生活を送るには、家族の協力も不可欠である。入居当時はあまり協力的ではなかった家族に対しても、根気強く電話連絡・来所時等の機会に、利用者の生活状態や行動に対して丁寧に説明したり、利用者の状態を理解していただくために病院受診をお願いすることもある。家族が医師からの説明を聞かれたことで病気について理解され、介護度も上がると在宅生活が困難になる事を十分納得されるので、入居を希望される。また利用者が地元の人で、地域住民も家族を